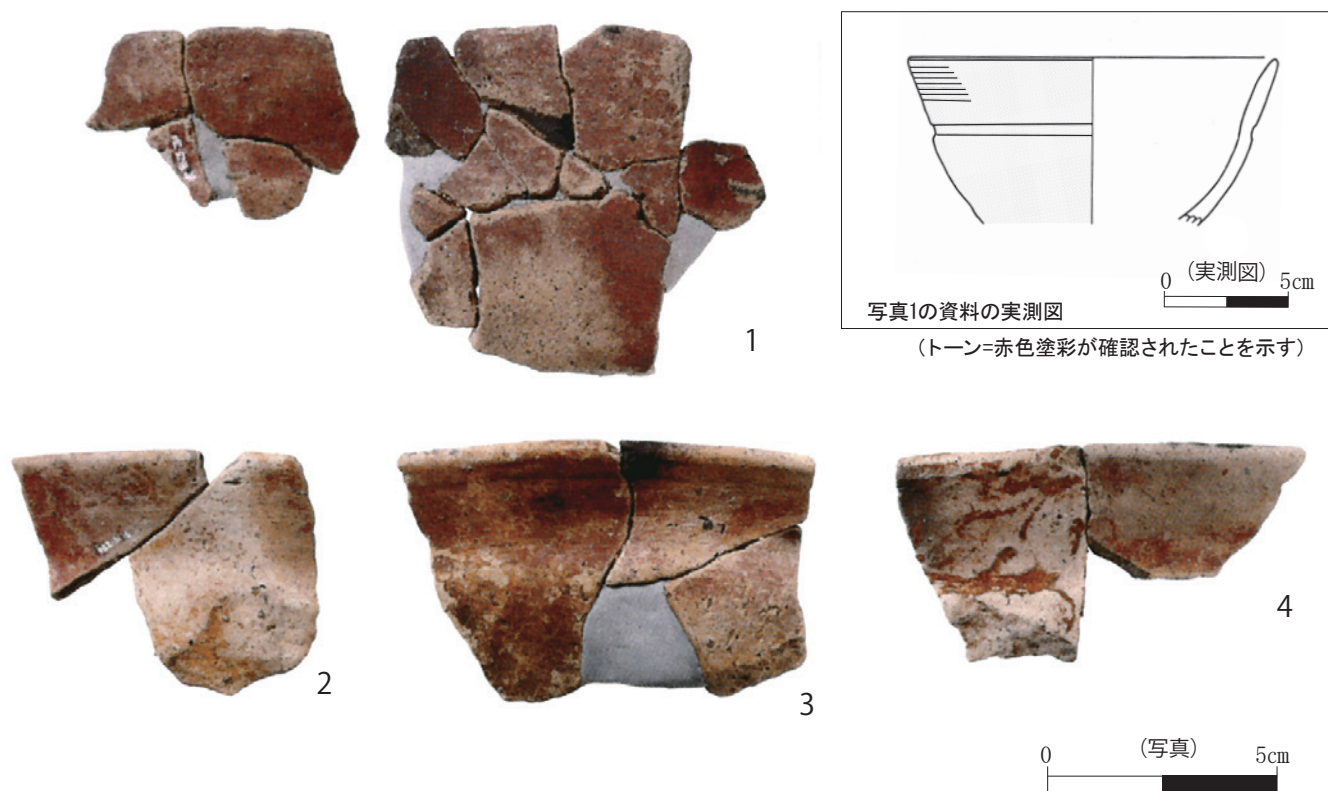


埋蔵文化財調査センター
ニュースレター

特集 赤く塗られた坏

北海道大学構内の遺跡からは、高さが15cmに満たない、^{つぎ}坏と呼ばれる小形の土器が出土しています。続縄文後半期（北大式）の地点では出土点数が少ないのですが、擦文期になると多くの個体が出土するようになります。そうした坏のなかには、土器の外面に顔料による赤色塗彩が確認できる資料があります。発見された土器の状態ではだいぶ色褪せてしまっていますが、製作された当時は、大変色鮮やかなではなかったかと考えられます。これらの赤色塗彩された坏は、日常的な食事の際に用いられるというよりは、儀礼的な行為のなかで使用されていた可能性があります。同時期の本州各地には、同様の赤色塗彩された土器がひろく分布しており、坏のなかには器形や塗彩の特徴の共通性からみて、東北地方で製作され持ち込まれたものもあるのではないかと考えられます。

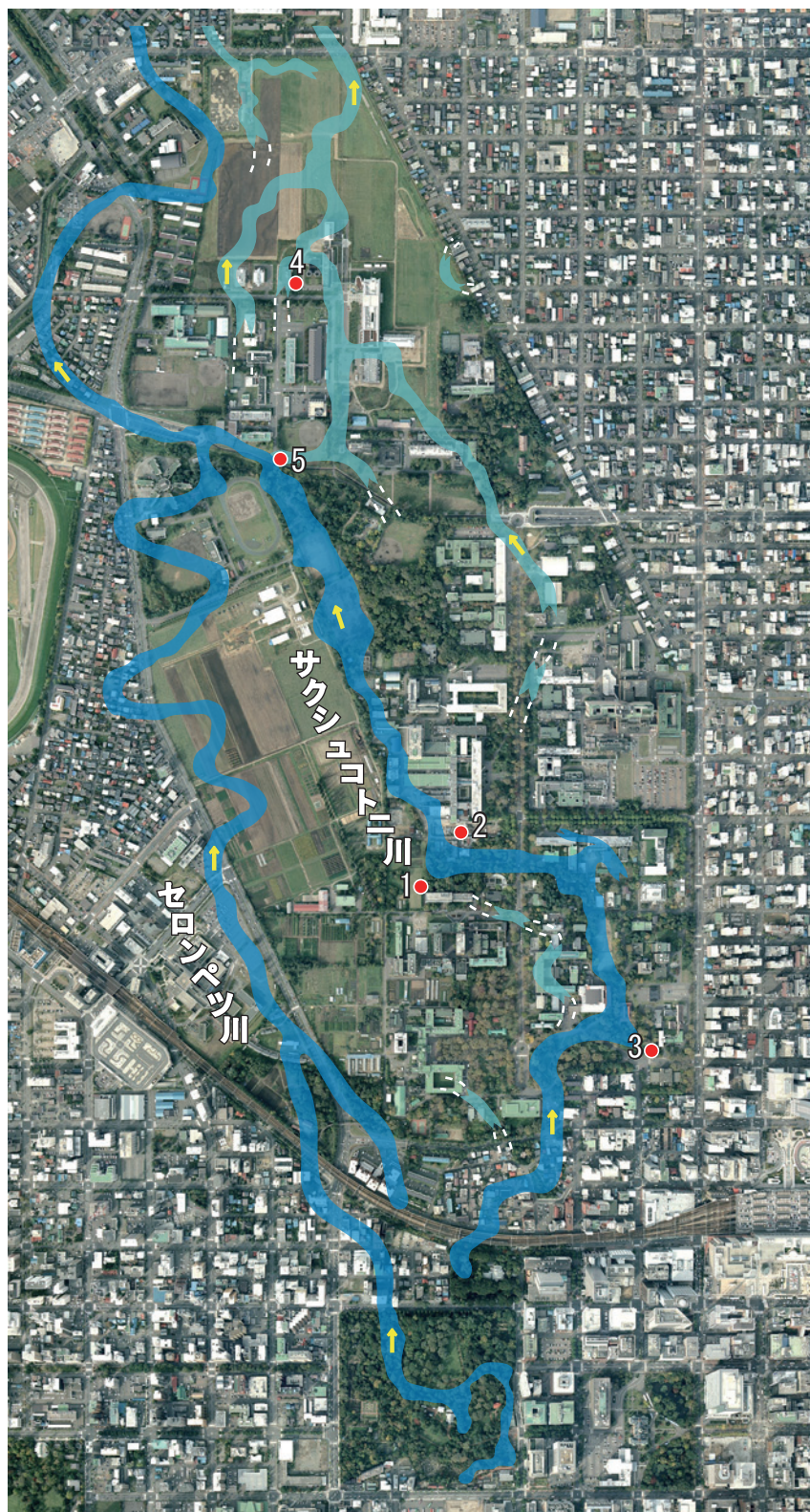
本特集では、この赤色塗彩された坏について紹介いたします。



▲ K39遺跡工学部共用実験研究棟地点から出土した赤彩土器

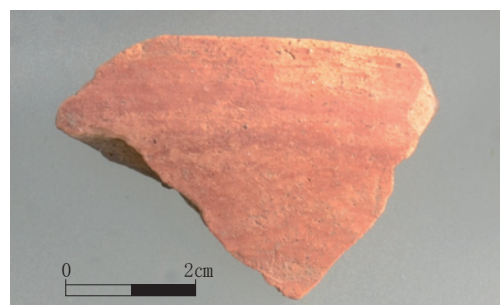
坏の口縁部破片資料。2～4は、それぞれ別の個体に属する。それぞれの外面に赤色塗彩の痕跡が認められる。退色や剥落により、塗彩は土器の一部で痕跡的に確認されるにとどまる。続縄文後半期の5～6世紀頃（北大式）に残されたものである。そもそも北海道内の続縄文後半期の遺跡において坏の出土数はきわめて少なく、そのなかでも赤色塗彩されているものはかなり珍しい。

赤塗土器の出土地点



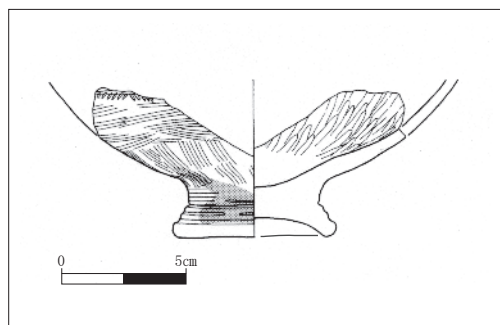
▲ K39遺跡ポプラ並木東地区地点から出土した坏

口縁部破片資料。外面に赤色塗彩の痕跡を部分的にとどめている。口縁部はゆるやかに内湾し、底部は丸底であったとみられる。器形の特徴から、東北地方を中心にみられる土師器の南小泉式(古墳文化中期の5世紀頃のもの)に比定されている。



▲ K39遺跡事務局本館屋外排水設備地点から出土した坏

口縁部破片資料。外面に赤色塗彩の痕跡が認められる。第1号竪穴住居址(HP01)の覆土から出土した。擦文前期の8世紀前半頃のものと考えられる。東北地方の「関東系土師器」とされているもの可能性がある。



▲ K39遺跡第6次調査地点から出土した坏(『K39遺跡第6次調査』)
(トーン：顔料塗布範囲)

底部から体部にかけての破片資料。擦文中期末から後期初頭に位置づけられる。第46号竪穴住居址(HP46)の覆土から出土した。底部外面に赤色塗彩が認められる。

▼ 北海道大学構内から赤色塗彩された坏の出土地点

番号	地点名称	出土位置	個体数	時期	報告書
1	K39遺跡 ポプラ並木東地区地点	包含層	(1)	続縄文(北大)	『北大構内の遺跡5』
2	K39遺跡 工学部共用実験研究棟地点	包含層	(5)	続縄文(北大)	『K39遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』
3	K39遺跡 事務局本館屋外排水設備地点	HP01	(1)	擦文前期	『北大構内の遺跡XXIII』
4	K39遺跡 国際イノベーション拠点施設地点	HP03	(1)	擦文前期	『北大構内の遺跡XXII』
5	K39遺跡 第6次調査地点	HP46	(1)	擦文中～後期	『K39遺跡第6次調査』 (札幌市文化財調査報告書 65)

■ 赤色塗彩の顔料

赤色に塗彩するための顔料には、赤色硫化水銀(HgS)を主成分とする水銀系の天然辰砂や人工の水銀朱、四酸化三鉛(Pb3O4)を主成分とする鉛系の鉛丹、赤色酸化鉄(Hematite: α -Fe2O3)などの酸化鉄系物質を主成分とするベンガラの三種類があることが知られています。ベンガラには、赤土ベンガラ、丹土ベンガラ、赤泥ベンガラ、パイプ状ベンガラ、ローハベンガラ、鉄丹ベンガラなど、鉱物や土壌、生物(バクテリア)に由来する様々な種類があります(北野信彦2015「ベンガラとは何か」『大地の赤 ベンガラ異空間』)。顔料として利用されるベンガラは、朱や鉛丹と比較すると、原材料が手に入れやすく、量産が容易であるため、スペインのアルタミラ洞窟の壁画のように、人類はベンガラを顔料の素材として古くからさかんに利用してきました。



▲ベンガラ(『大地の赤 ベンガラ異空間』)

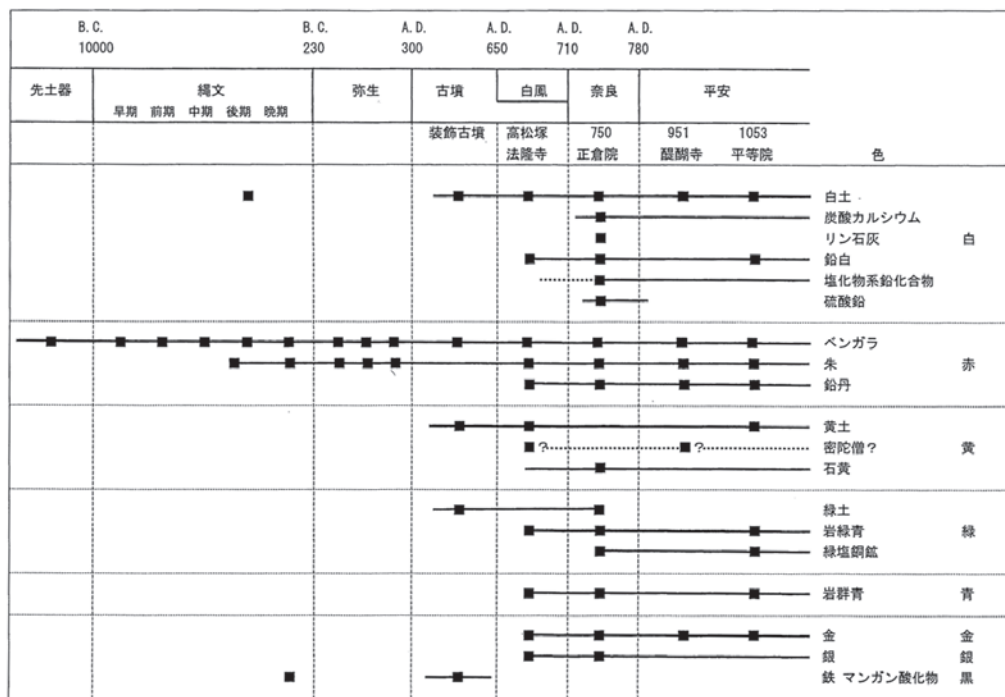
ベンガラが顔料として利用できるようになるまでには、原材料の採集・採掘、焼成、粉碎・磨り潰し、水漉し、煮沸などの工程が必要とされています。土器への塗彩は、水などに溶かして土器の器面に塗布、焼成によって定着させていたとみられます。

北海道大学構内の遺跡から出土した赤彩土器はほとんどが坏であり、東北地方で発見されているものと器形や塗彩の特徴が共通している資料に関しては、同地方で製作された可能性が指摘できます。同時期の東北地方では、ベンガラを主な顔料として土器の外面に塗布していたことが、塗彩物質の分析から明らかにされています(米田寛他2017「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究(1)」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』36)。北海道大学構内で出土している赤色塗彩された坏も、ベンガラが顔料として利用されている可能性が高いといえるでしょう。

■ 塗彩のために利用されてきた顔料

人類は、器物や建造物を彩るために、自然から得られる原材料をもとにした様々な顔料を利用してきました。日本列島の歴史においても、赤色だけでなく、白・黄・緑・青・金・銀・黒色などの塗彩のために、多様な顔料の利用がなされてきたことがわかっています。図は、日本列島においてどのような種類の顔料が、いつ頃から利用されてきたのかをまとめたものです。古墳・白鳳期になって多様な顔料の利用が始まっていますが、これは古墳の壁画や寺院などでの利用に関係するものです。社会・政治的な変化を背景として、新しい技術が導入されたものと考えられます。

このように比較してみると、赤色の塗彩は突出して古くからおこなわれていることがわかるでしょう。とくにベンガラは縄文文化以前からすでに利用の開始が始まっており、日本列島においては脈々と利用され続けてきた歴史がある顔料ということになります。

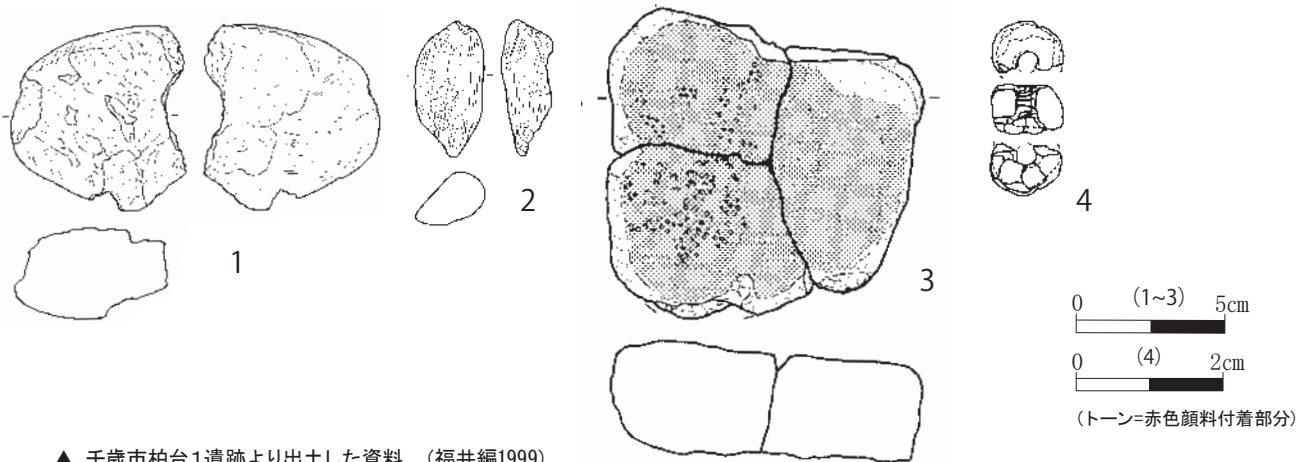


▲日本列島における顔料利用の変遷(成瀬 正和 2002『正倉院宝物の素材』日本の美術439、至文堂)

■ 装飾のための顔料と玉

千歳市柏台1遺跡は、縄文文化以前に属する遺跡で、24,000～25,000年前頃に残されたとみられています。財団法人北海道埋蔵文化財センターによって実施された発掘調査によって、北海道でも初期のベンガラ顔料利用にかかわる資料が出土しています(福井淳一編1999『千歳市柏台1遺跡』)。本遺跡では、材質の違いにより黒色礫(マンガン)・赤色礫(針鉄鉱・赤磁鉄鉱)に分類された、顔料の原石(擦られた痕跡のないもの)(1)や原材(擦られた痕跡が観察されたもの)(2)とともに、顔料の付着が認められた台石(3)が出土しました。また、炉址周辺の半径約1.5mの範囲に顔料の沈着が確認された箇所もありました。これらのことから、遺跡内で黒色礫・赤色礫を擦って顔料の生産がおこなわれていたことが明らかとなっています。また、それとともに本遺跡では琥珀製の玉(4)が出土していることも注目されます。

土器も、恒久的な建造物も作られていなかったこの時代、顔料は、ヒトが身に着けていた衣服(例えば毛皮)あるいは身体そのものを彩ることに用いられていた可能性が高いと思われます。紐を通してネックレスのように身に付けていたと想定される玉とともに、身体装飾をおこなうところから顔料の利用が始まったといえるかもしれません。



▲ 千歳市柏台1遺跡より出土した資料 (福井編1999)

■ 『考古学からみた北大キャンパスの5,000年』

総合博物館との共催で開催された「K39:考古学からみた北大キャンパスの5,000年」(令和元年7月19日～9月29日開催)にあわせ、標記の図書が中西出版から刊行されました(本体価格1,200円)。北海道大学構内の遺跡や出土資料の情報が網羅されています。一般書店で注文・購入できますので、是非ご覧下さい。



表紙

裏表紙

■ 第12回調査成果報告会延期のお知らせ

すでに当センターのホームページではお知らせしましたように、令和2年3月8日に予定しておりました第12回調査成果報告会(主催:北海道大学埋蔵文化財調査センター)に関しては、新型コロナウイルスの流行拡大を鑑み、開催が延期となっております。新しい開催日時については未定です。

楽しみにして頂いていた方には大変申し訳ありません。主催者としても残念ですが、何卒諸事情お酌み取り頂き、ご理解いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

編集後記

寺社の建物や城、町屋、陶磁器などに見ることができるように、「赤」は人類にとって身近で、なおかつ他の色とは異なる感覚をもたらす特別な色だったのでしょか。色あせてしまっていますが、そうした意識は、遺跡から出土した土器からも伺うことができます(高倉)。

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター 第34号
令和2(2020)年2月28日発行

発行 : 北海道大学埋蔵文化財調査センター

〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話 : 011-706-2671 FAX : 011-706-2094

e-mail: hokudaimaibun@gmail.com

URL : <http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/>

印刷 : 柏楊印刷株式会社